

月の花挽歌 ～8. 人情紙風船～

8.人情紙風船

8 - 1

クリスマスイブ迄には二週間ほど早かったけれど、立て続けにシャンパンが開けられると、顔ぶれも相まって、そこの席だけがフォローピンスポットライトで浮かび上がった舞台の一場面さながらであった。

銀座でも有数のクラブで遊んでいるんだという常連客にとっては、否応なくステータス感をないがしろにされたようで、その場に居合わせたことが不運だったのかもしれない。

真紀にとって銀幕の大女優Kの来店は歓迎すべき意外な出来事だったけれど、それにもまして、『フラワーベッド』の令子がKを友人然として連れ立って来てくれた行為そのものが無性に嬉しかった。

真紀にはKと令子の関係がパリであることは容易に想像できたので、初対面のTたちには、敢えて令子の紹介をしないでした。

Tたちも、令子のことをKの連れとして存在感そのままを自然な流れで迎え入れた。

「Kさんがルポされたテレビ番組『とびっきりフランス旅』を観ました。長年いらっしゃるだけのことはあって、案内されたパリやプロバンス地方に行ってみたい気分させられました」とTが思い出したように言った。

「ぜひ、いらして！スケジュールが合えばご案内しますわ」とKはローズピンク色のシャンパンをスチール写真のごとく一口飲んでから潤いを含んだ声で言った。

「本気にしちゃいますよ……。それにしても色々なフィールドでご活躍されているのを見ていると、私もいい刺激になります」とTは眩しそうな眼をKに向けて言った。

「これでも、自分を見失わないように必死なんです。400年前に建てられた家で一人暮らしをしていると、時間の観念が無くなって、怠け癖がついてしまい、足元から朽ちていくのさえ気づかなくなってしまうのではないかと恐怖心に苛まれるのです。時間に身を任せて老いに抗わずに生きられたら良いのでしょうかけれど、困ったことに悪あがきの血が騒ぐのです」とKはパントマイムを交えて道化た口調で語った。

「400年ですか！それがパリなんですね」と長身の男優が、彼なりの視点で感心する。

「恋をするのも悪あがきなんですか？」

とKの一つ一つの言葉に耳を傾けていた女優が外連味のない言いつぶりで唐突に尋ねた。

月の花挽歌 ～8. 人情紙風船～

8 - 2

(恋の悪あがき)の一節がインサートされた刹那、座が白けてコマ送り状態になった。

「越路吹雪が歌ったシャンソン『恋心』はご存知かしら？」とKに代わって令子が女ざかりの女優に逆に問い返すことで、危うい場면을秒二十四コマの正常値に戻した。

「恋は不思議ね消えたはずの灰の中から何故に燃える♪……」と令子が小声で口ずさむ。

Tは先程から目の端にちらちらと映っていた女の、よもやよもや連れの女優の吐いた禁句のセンスティブな波動を、シャンソンを通じて中和する役どころを買って出てくれた心憎い配慮にショックを受けた。

「岸洋子も歌っていませんか？」とTは令子にサポートをするつもりで尋ねた。

「そのフレーズ、岸洋子の歌なら聞いた覚えがあります」と女優は令子とTの顔を見比べながら答えた。

「でしたら、(恋なんてむなしなものね 恋なんて何になるの)って印象的な歌の下りもご存知でしょうか？」

「思い出しました。きっと、その歌の肝の部分ですよ」と女優は分かったようなことを言った。

「それを先ほどの答えにするのは乱暴すぎるでしょうか？」

「いいえ、しっかりと胸に落ちました。例え話がお上手ですね！」

「脇から口を挟んだりしてごめんなさい。そう言ってくださると助かります」

「謝ることなんかありませんよ。『恋心』を引き合いに出すあたり貴女の見識の高さには脱帽です。確か『恋心』はフランスの歌じゃなかったですか？」とTは取りなし顔で言った後で尋ねた。

「そうです。私の知る限りですが、『恋心』のフランス語の原題は、『恋はなんのためでもない』と和訳します。東京オリンピックが開催された年に岸洋子が初渡仏した際、エンリコ・マシアスが歌っているのを耳にして、何とか帰国記念盤として発売にこぎ着けたようです。私はどちらかたというとは後発の越路吹雪の歌い方が好きです」と令子は丁寧な解説をした。

老いらくの恋の渦中にいるKは、ひとり娘より年下の女優から無遠慮な言葉を掛けられて気分を損ねた。

悪意が含まれていなかったのが尚更こたえたが、令子の気働きのおかげで不快感が解消されて、グランクリュ(特級畑)のロゼシャンパン本来の繊細で奥深い風味を味わうことができた。

因みに、フランス宮廷ではマリー・アントワネットやポンパドール夫人らがこぞってシャンパンを愛好したそうです。

月の花挽歌 ～8. 人情紙風船～

8 - 3

多少の事では動じない真紀でも半端ない個性豊かな面々が顔を揃えると、目配り、気配り、心配りで腋の下にじんわりとかく汗で肌襦袢が次第に湿り気を帯びてくる。

そうかと言って、その人々のおかげで横田との揉め事でうんざりしていた空気感が取り除かれたわけだから、真紀にしてみれば救いの神ともなるのだ。

真紀が横田の様子をうかがうと、心ここにあらずの状態、辞するのに最適なタイミングを掴めないで焦燥感に駆られているのが透けて見える。

「横田君、今度映画を撮るんだが、タイトルを担当してくれませんか？」とTは問いかけて、画家を話の輪に引き入れようとした。

「タイトルですか？」と不意を突かれた横田は、Tの言っている趣旨が呑み込めなくて聞き返した。

「芸大の君の先輩で画家の高塚省吾を知っているかな？」

「……知りませんが」と横田は少し間を置いて答えた。

「芸大は数多の画家を輩出しているし、彼は油画専攻だから無理もないか……。Kさんはご存知ですよ」とTはKが知っているのが当然とばかりに尋ねた。

「はい、小津安二郎監督映画のタイトルを何本か担当なさった方ですよ。撮影所で紹介されたこともあります。私と同世代のせいもあってか話が合いました。高塚さんが描かれた裸婦の美人画は、油でもパステルでもとても印象的で好きです」

Tはタイトルの話に興味を示さない横田に内心失望したけれど、素早く表情を読みとって、それ以上はその話題に触れなかった。

「Tさんも人が悪いですね。次回作を準備していることなど初耳です」と俳優が不満顔で言った。

「そうですよ、概要だけでも教えていただけませんか」と女優も単刀直入に言った。

「私も興味がありますわ」とKは穏やかな笑みを浮かべて追従した。

三人の看板俳優にせがまれて、満更でもない様子を見せていたTは、真紀に新たに作ってもらったコニャックの水割りを一口飲んでから、おもむろに新作の構想を話し始めた。

「今から半世紀以上前の昭和十二年に公開された山中貞雄監督の『人情紙風船』をリメイクする準備を進めている……」と言ったところで一呼吸置いた。

「素晴らしい企画ですね！クランクインの予定はいつごろになりますか」とKは身を乗り出して、話の続きを急かせた。

月の花挽歌 ～8. 人情紙風船～

8 - 4

Tの話の続きが始まると、横田を除く同席者の間から静かな波動が起こり、それは徐々に興奮の息遣いに変化していった。

『人情紙風船』は、時代劇映画の一つのジャンルの中で最高傑作として映画人ならまだしも真紀や令子までもが認識しているある種普遍的な人情の機微を市井に生きる人々の日常に絡めて描いた山中貞雄作品である。

昭和十二年に勃発した日中戦争の為、『人情紙風船』の封切り当日に山中貞雄に赤紙が届き、中国へ出征する羽目になり、あろうことかひと月足らずで戦病死してしまう。享年二十八歳の惜しまれる逸材であった。

「本歌取りと同じようなものだから、台本はあらかじめ仕上がったし、パブリックドメイン化しているので、知的財産権侵害などの問題はないんだ。『源氏物語絵巻』を修復するように、優秀なスタッフと最新の映画機材を駆使してリメイクしなければ、やる意味がないと思っている。あとは企画書を持って協賛依頼の企業行脚をしなければならない。製作費の八割方の目処がつけば、制作内容などの公表をするつもりだが、来年の六月ごろまでにはクランクインする予定でいるんだ」とTは自信ありげに熱っぽい調子で語った。

「オリジナル版を尊重して、忠実に再現するというのでしょうか？」と接遇に徹しようと思っていた真紀だったが、どうしても確かめたくなくて尋ねた。

「この映画は歌舞伎で演じられた河竹黙阿弥の通称『髪結新三』が原作なんだ。山中監督とは時代が違うので面識はないが、彼が私の伯父とは因縁めいた関係にあったことも、今度の動機づけの一因になったのは確かだ。余談が長くなってしまったけれど、忠実にというよりは誠実に繋ぎたいと思っている」とTはよもやま話を挟んで答えてくれた。

「キャスティングはもう決めていらっしゃるのですか？」とKは相手の表情をじっと見たまま、シャンパンで赤みを帯びた頬を両手で包みながら尋ねた。

「ある程度は目星をつけていますが、まだ打診はしていません。相手方にもスケジュール調整が必要でしょうから、そろそろお願いしなければなりません」とTは慎重に言葉を選んで言った。

「私に年相応の役どころがあれば、端役でもなんでも使ってくださいませんか」とKは前のめりに言った。

「ありがとうございます！端役だなんてとんでもない。こうしてお会いできたのも何かのご縁に違いありません」とTは言って、あんにキャスティングする気持ちを伝えた。